# とある茨の禁書目録

darkrad26

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある茨の禁書目録

【Ｎコード】
Ｎ９２５６Ｚ

【作者名】
ｄａｒｋｒａｄ２６

【あらすじ】
とある魔術の禁書目録の世界に紛れ込んだ一人の異物。
彼はどのような影響を物語に与えるのだろうか。
とある茨の禁書目録はじまります。

# プロローグ

『学園都市』

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら
東京都の中央三分の一を円形に占めている。

「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っている学生の街である。

その学園都市のある研究所。
普段なら置き去りなどを使って非人道的な研究を行っているが、
今は半壊しており、銃声や悲鳴が響き渡っている。

「ったく、この程度の研究所潰すのになんで俺が出てこなきゃならないんだよ」

そう悪態をつきながら銃弾飛び交う研究所内を歩いているのはホストのような格好をした少年。
何よりも目をひくのは背中に生えている純白の羽根だろう。
時折思い出したようにその羽根を振るい、あたりを破壊している。
学園都市に8人しかいないレベル5の第二位『未元物質』垣根帝督

である。

「しょうがないじゃない。どんなにつまらない依頼でもウチ(スクール)に来た以上断れないんだから」

そう答えたのは１４歳ほどで、小柄で華奢な体つきにも拘らず、まるでホステスのような背中の開いた丈の短いドレスを着込んでいる少女。
垣根帝督とは違い、特に何もせず一歩後ろを歩いている。

「ってかお前も仕事しろよ。さっきからついてきてるだけじゃねぇか」

「私の能力は『心理定規(メジャーハート)』、戦闘向きじゃないんだしいいじゃない。邪魔はしてないでしょ？」

「確かに邪魔はしてないけどよ。さっさと終わらせて帰りたいんだよ」

垣根はため息をつきながらそうぼやくと前方にある厳重に封鎖された扉を一瞥すると
羽根の一撃でもって跡形もなく吹き飛ばした。

「……」
「…なによこれ！？」

部屋に入った二人の眼に飛び込んできたのは殺気立った研究員達…
ではなく、おびただしい数のおそらく研究員であろう死体。
ここで迎え撃つつもりだったのだろう。銃やら駆動鎧、その他にも
用途のわからない機械がそこら中に
散らばっている。
それだけなら驚くことなはない。他の構成員が始末した後に自分た
ちが来たのかもしれないからだ。
だがそれは撃たれたりなんなりしてただ死んでた場合のことだ。
だがこの死体たちは例外なく全て干からびている。
中にはまるで数千年も放置され風化したように崩れているものもあ
る。

「これってミイラ？ここはエジプトじゃなくて日本よ？」

「体中の血液が抜かれてやがる。こんなことができるのは…」

「オレだよ」

生きてる人間は誰もいないはずの部屋に声が響く。
その瞬間垣根はさらに羽根を生やし、三対の翼でもって臨戦態勢を
取り、
『心理定規』はその後ろに避難し拳銃を構える。

「警告だ、第二位。最近の行動は目に余ると統括理事会からのお達

しでな。そのせいで
　このオレが派遣されたわけだ。心当たりはあるか？」

その声が聞こえてきたのは二人の頭上。なぜ気付かなかったのだろうか。
そこにいたのは魂まで奪われそうな雰囲気を持ち、天井に直立する漆黒の青年。
片目を覆う黒い長髪を無造作に括り、オーダーメイドであろうダークスーツを着こんでいる。
重力に囚われていないのかまるで天井が地面だというように佇んでいる。
何よりも特徴的なのはその眼、すべてを俯瞰するような無機質な瞳だった。

「てめぇ第六位か！警告なんざされる謂れはないぞ！」

そう叫びながらも内心では学園都市への反逆計画がばれたのかと焦りまくっている垣根帝督。
普段ではありえないことだが焦りや相手が第六位ということもあって思わず考え込んでしまい目を離してしまった。
気付いた時にはもう遅い。能力の相性がいいとはいえ、自分では第六位には勝てないのだ。
致命的な隙を晒したかと歯噛みしながらも一撃入れようと天井に視線をやる。
が、最早そこには誰もいない。

「ちっ！（くそっどこに行きやがった）」

思わず舌打ちをしながらいつでも離脱できるように周りに気を配る。奇襲されたらその一撃を防ぐ自身は垣根にはなかった。

「やあ久し振りだね心理定規。よかったらこれからディナーでもどうかな？」

「お久しぶりです北斗さん。私でよかったらぜひお願いします」

「やはり君は笑っている方が可愛いね」

「そんな可愛いだなんて…」

悲壮な垣根とは違い第六位と心理定規は楽しそうに会話していた。しかもさっきの雰囲気はなんだったのかというほどの爽やかさである。

「北斗ォォォッ！！てめぇ今めっちゃシリアスだったじゃねぇかよ！」

「うるさいぞ垣根。今いいとこだろうが」

「うるさいわよ。今北斗さんと話してるんだから」

「えっ？俺がおかしいのか？ってか息ぴったりだなおい」

一蹴である。最早その姿は可哀そうをを通り越して哀れですらあった。
そして二人は垣根を無視してまだ楽しそうに会話している。

「そういえばまだおじさん達の相手をしているのかい？
気晴らしならオレがいつでも付き合ってあげるよ」

「本当ですか！？じゃあ部屋をとってあるのでディナーの後にでもそこで／／」

「相変わらず積極的だね。喜んで付き合わせてもらうよ」

いちゃいちゃしている。
だが忘れているかもしれないがここはミイラが転がっている部屋の中である。
台なしだった。

「おい北斗。やっぱりこのミイラ共はお前がやったのかよ？」

復活した垣根である。
実に空気の読めない男である。

「…冷蔵庫が。……当たり前だろ？他にこんなことができる奴がい

るんなら教えてほしいものだね」
「今なんつった？なぁ？なぁ？」
「それで警告についてだが…」
「無視かよっ！」
「黙れ冷蔵庫。そんなんだからチンピラホストって言われるんだよ」
「てめぇぶっ殺してやらぁぁぁっ！」
「黙りなさい冷蔵庫。北斗さんが話してるでしょ」
「なんなんだよもう…」

またもや一蹴。懲りない冷蔵庫である。
そんな垣根は無視して北斗は話を続ける。

「お前最近仕事の度に物を壊しすぎなんだよ。修繕費も馬鹿にならないらしくてな。
借金になるらしいから…まぁ頑張れ」
「…そんなことで来たのか？」
「暇だったからな。アレイスターの頼みを断るのもあれだし」
「ご苦労さまだな。…ちょうどいいから仕事手伝ってくれねぇか？

お前の『茨棘之冠』ならすぐ終わるだろ？」

「さっきの会話を聞いてなかったのか？オレはこれからデートなんだから無理だ。

じゃあ行こうか？」

「はい北斗さん」

そう言うと北斗は心理定規を抱きかかえる。いわゆるお姫様抱っこだ。

何度でも言おう、ここはミイラだらけの部屋である。

「まだ仕事が終わってねぇぞ！？」

「そんなもんお前がやれよ。何のためのレベル５だ」

「男女差別反対！」

「女の子には優しくするもんだよ。

…っと、言い忘れてたが借金は１２億２８００万だそうだ。それじゃ」

「…は？ちょっ待っっ…」

垣根が詰め寄ろうとするがすでにそこには二人の姿はなくただ空しく声が響くだけである。

どれほど時間がたっただろうか？呆然とする垣根の前に頭部に環状

の金属製ゴーグルをつけた少年が歩み寄る。

「リーダー終わりましたよ。……どうかしましたか？」

「…12億…ふっふふふふふふふふ」

「リーダー！？」

しばらく研究所に不気味な笑い声が響き渡った。

## プロローグ（後書き）

はじめましてｄａｒｋｒａｄ２６です。

この小説は妄想があふれ出た結果によるものなので見苦しいと思いますが、

感想もらえたりすると励みになります。

ちなみにこの小説の主人公は黙っていればインテリヤクザにしか見えないと言われた作者をモデルにしています（笑）

# 主人公紹介

名前

御門北斗（ミカド　ホクト）

容姿

外見年齢は２４歳ほどだが実年齢は１８歳。
黒髪の長髪で左目を覆い尽くしており、胸辺りまでの髪を首の後ろで無造作に括っている。
服装はオーダーメイドのダークスーツ。学生には全く見えない。
顔はそこそこ整っている方だが見た目はインテリヤクザ。

能力

レベル５の第六位『茨棘之冠（クラウンソーン）』
体表から黒く染まった茨のようなものを生やし、自身の体及びその茨に触れたあらゆる物を吸収する。
ただし固形物は吸収できない。
副次効果として吸収したエネルギーを使って身体強化を行える。
この能力にはまだ秘密があるようだが……

性格

黙っていれば外見も合わせて、他者を威圧するカリスマのようなものを放っているが、
しゃべり始めるとそこらへんにいるような兄ちゃん。
ただ本人は自身の外見効果を理解しており、威圧するような演技をしていることが多いため性質が悪い。
原作主人公のようなフラグ建築能力はないが、恋愛は得意らしく狙った女は必ず落とすと豪語するほど。
現在は５股掛けており修羅場が発生する日は近いのかもしれない。

## 主人公紹介（後書き）

この主人公紹介はあくまで簡易的なものであり、核心には一切触れておりません。

## 第一話（前書き）

短いです

# 第一話

「さて、今日は何をして暇を潰そうか」

そんな気の抜けた呟きをもらしたのは御門北斗、つい先日垣根帝督を恐怖（？）のどん底に陥れた男である。もっとも本人にとっては取るに足らない出来事ではあったが。
それはともかく現在時刻はＡＭ１１：００、平日であることから彼も学校に行かなければならないはずだが、彼に学校に行く気は全くなかった。
そもそも学校になど通ってないため、ここは学生寮ですらなく、彼が年間契約しているホテルの一室である。

「…それ私を抱きかかえながら言うセリフじゃないよね。あれか？私は愛玩人形かなにかか？」

そう彼の腕の中で文句を言うのは１２歳程度のパンク系の衣装を着ている少女。前を揃えた黒い髪は肩甲骨の辺りまで伸びているが、アクセントのためか耳元だけが金色に色を抜かれている。
彼がリーダーを務める暗部組織『グループ』の構成員、黒夜海鳥である。
もっとも言葉とは裏腹に頬をわずかに紅潮させ完全に甘えきってい

る。

「ほらそんなに拗ねるなよ。さっきまでみたいにニャーニャー言ってごらん？」

「好きで言ってたンじゃねェ！！北斗が猫耳アタッチメントつけさせたせいだろォがっ！」

「でも盛り上がったじゃないか。けど土御門とキャラ被るし普段からは無理かなぁ」

「っっっ！そもそもこんな少女に手出して恥ずかしくないのかよロリコン！！」

「老若男女の区別なく、私は全てを愛している！」

「余計悪いじゃねェかっ！しかもなにドヤ顔してやがる変態！」

「落ち着けって。口調がどこぞの白もやしみたいになってるぞ？」

「誰のせいだ！誰のっ！」

「キスしてやるから機嫌なおせよ」

「うるさいっ！私がその程度で機嫌なおすような軽い女だと思ったら大間違いなんだよっ！……いや別にしてほしくないわけじゃなくてだな、その……んぅ」

「んっ（しかし暗部の女はちょろいなぁ。やっぱり優しさとかに飢

えてんのかね）」

しばらく部屋に水音が響いた後、そこにいたのは骨抜きになって眠る少女だけであった。

「…んにゅ…北斗ぉ…」

「外に出てきたのはいいがどうするかな？鉄網ちゃんでもデートに誘うか、アイテムの女の子でも攻略に行くか…悩むな」

ついさっきまで女の子と一緒にいたとは思えない言葉だ。まさしく女の敵である。
今日も学園都市は人で溢れかえっているが彼の歩くところだけ綺麗に人が分かれ道ができている。
さながらモーセの如く。もっとも彼には十戒など微塵もないが。

そんな彼に物好きにも近づくものがいた。

「ちょっとアンタ！待ちなさいよ！」

「ん？やぁ、美琴ちゃんじゃないか。学校はどうしたんだい？」

「もうとっくに終わったわよ。そういうアンタはどうなのよ、いつもスーツ着てるけど学校行ってるの？」

「もうそんな時間か。それよりなにかようかな？」

「そうよ！アンタ私と勝負しなさい！」

「またかい？オレとしては誤って美琴ちゃんの可愛い顔に傷でもつけたらと思うと戦々恐々だよ」

「可愛っっ…いいから勝負しなさい！第三位の私が第六位のアンタに負けるなんてあり得ないんだから！」

「だからレベル５の順位は学園都市の利益が基準であって戦闘能力には関係ないとあれほど…」

「いいからついてきなさい！場所を移すわよ！」

そう言うと美琴は後ろを振り返りもせずずんずんと歩いていった。その顔が赤かったのは見間違いではないだろう。実にツンデレである。

「やれやれ、不幸だ―ってね」

誰にも聞こえないように呟きながら後ろをついていく彼の口元は妖しく歪んでいた。

## 第一話（後書き）

この主人公は下種です、外道です、屑です。
場合によっては寝取りもあるかもしれません。

まぁ女の子もばれなきゃ幸せそうですしいいのです…多分（笑）

さて次話ですが今日中には書きたいと思いますがまだ内容を決めてません。
このまま美琴と戦闘して能力の一端を示すか、アイテム攻略ルートにするか。
皆さんはどちらがいいですか？

## 第二話（前書き）

アイテム攻略ルートを希望する方がいたのでＶＳ美琴はサクッと終わらせたいと思います。

# 第二話

「またこの河川敷か？」

「他に暴れても平気な場所がないんだから仕方ないでしょ」

二人がいるのはとある学区にある河川敷。ここで二人が戦うのはこれで2回目となる。

5メートルほどの距離を置きお互いに向き合っているがその姿は正反対。

美琴は髪からバチバチと断続的に放電しており、片や北斗はポケットに両手を入れながら泰然と立っている。

「相変わらず余裕の態度よね。勝者の貫禄ってやつ？」

「余裕も何もオレに勝てそうなのは『最大原石（ナンバーセブン）』位だ」

「第七位？なんで最下位なんかに…」

「アイツは説明のできない力のせいで第七位にされてるが戦闘能力は大したものだからな。もしかしたら第一位にも勝てるんじゃないか？」

「それは遠まわしに自分が最強って言いたいわけ？調子乗ってんじゃないわよ！」

言い放つ美琴から幾条もの雷撃の槍が放たれる、まともに反応できないような速さ以上に特筆すべきはその数の多さ、逃げ場を奪うように配置された雷槍は例え初撃をかわすなり迎撃するなりしたとしても続く弾幕の前にその体中を貫かれるだろう。莫大な閃光と雷鳴と共に次々と着弾し帯電した塵を巻き上げ北斗の姿を隠す。神の怒りにも例えられるその一撃をもってすれば人体などひとたまりもない、瞬く間にその身は焼き焦がされ命を散らすだろう。それだけの威力が雷槍には宿っていた。

「…いつまでそうしてるつもり？手加減してないとはいえアンタならこの程度なんでもないんでしょ」

「開幕を告げる言葉も無しの無粋な先制に呆れているんだ」

声が響くと同時に宙を待っていた塵が停止する。その一瞬後引きずり込まれるように内側に風が吹き、視界が晴れた先にいるのは先ほどと一切姿勢の変わっていない北斗だった。

「あの威力といい数といいお前はオレを殺したいのか？…まぁ無駄でしかないがな」

「…みたいね。じゃぁこれならどうかしらっ！」

取りだしたのは一枚のコイン、それを親指で上に弾いたあと落ちてきたコインを莫大な速度でもって射出した。御坂美琴を象徴する能力名にもなった一撃、『超電磁砲（レールガン）』である。

「何かと思えば馬鹿の一つ覚えか。無駄だと言っているだろう」

おもむろに超電磁砲に手を伸ばし何事もなかったかのようにその一撃を掴み取る。あの威力はどこに行ったのか、残ったのは彼の手の中の解けたコインの残骸のみだ。

「わかってるわよ。アンタの能力は純粋エネルギーを無効化なり吸収するなりしてるんでしょ？それなら回避不能の圧倒的質量で対処すればいい。…こんなふうに、ねっ！！」

「これは…」

「能力を応用して砂鉄を操ってんのよ。この場所なら量も申し分ない、すぐに助けてあげるから大人しく埋もれてなさい！」

「やれやれ…」

地形が変わるほどの圧倒的質量を誇る一撃。これならばあのツンツン頭の少年すら無効化できないだろう。美琴は確かな勝利の手ごたえを感じながら北斗を救出しようと再び砂鉄を操ろうとし…

「枯れ落ちろ」

「えっ？」

そんな呟きと共に目の前を黒い何かで覆われ意識を手放した。

「…いくらなんでもやりすぎだろう…どうすんだよこれ」

そこは先ほどレベル5同士の激突があった河川敷…いや戦場跡だった。美琴の最後の攻撃により土手が崩壊し川が砂鉄で黒く染まっている悲惨な光景が広がっていた。そんな爆心地に美琴を抱えた北斗は立っていた。

「ちょっと手加減間違えて必要以上に吸っちゃったし…服なんて風化してぼろぼろだもんなー。まぁなかなかいい眺めではあるな」

美琴の制服はもはや服としての機能を持っておらずいろいろと見えてはいけないものが見えている。具体的に描写しようものならすかさず規制が入るだろう。それをこの男は憚ることなく眺めている。さりげなく北斗の手が動いているように見えるのは気のせいだと信じたい。

「とりあえずオレのスーツでも着せてあげて…オセロを迎えに来させればいいかな？……もしもし黒子ちゃん？今●●学区の河川敷にいるんだけど愛しのお姉さまがあられもない姿で…っと

切れちゃったよ」

「こうやって大人しくしていれば文句ないんだがな。せっかく可愛いんだからもっと素直になればいいのにもったいないやつ」

「……（ピクッ）」

「ん？……相変わらず可愛いな、食べてしまいたいくらいだ」

「お姉さまー！（ピーッ）姿のお姉さまはどこですの！？」

「来たか…じゃあ続きはまた今度だねお姫様……」

「……（ボンッ）」

どこからかツインテールでオセロな風紀委員の声が聞こえてきたと思うと北斗は美琴の額に口づけし、その場を一瞬で立ち去った。

「お姉さま！？無事ですの！？」

「……額に……額に…」

「…お姉さま？」

「……ふにゃぁ」

「お姉さまー！？しっかりするですの！こんなとこで気絶しては！……チャンス？」

「なにしてんのよー！！！！」

「ああ〝っ愛がしびれますわ…」

黒子を折檻して普段通り振舞っているようだが額を押さえて赤面していては台なしである。

「くくっこれで仕込みは十分かな」

その様子を離れた所から北斗も観察していた。

## 第二話（後書き）

昨日中に更新できなくて申し訳ありません。
やはり戦闘シーンよりいちゃいちゃしているシーンの方が書きやすいです。

朝までにはもう一話あげたいと思いますのでご期待ください。

一見無敵に見える主人公ですがある致命的な弱点があります。
果たしてその弱点がいつ出てくるかわかりませんがそこを突かれれば子萌先生が相手でも敗北を喫します。

それでは今回はこのへんで、感想、意見などいつでもお待ちしております。

# 第三話

第七学区のファミレス、昼時という時間帯でもあることから多くの学生で賑わう店内でテーブル席に陣取り異色を放つ四人組がいた。

「あれ？今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁はなんか違う気がするけど。あれー？」

第四位『原子崩し（メルトダウナー）』麦野沈利である。店外で買ってきたであろうコンビニ弁当を正々堂々と食べながらそんなことを呟いては首を傾げている。

「結局さ、サバの缶詰がキてる訳よ。味噌ね、赤味噌が最高」

麦野の隣に座るのはフレンダ＝セイヴェルン。ベレー帽を被った金髪碧眼の高校生だ。缶詰を開けようとしているが上手に缶切りが使えないのか小型の爆破ツールを使って蓋を焼き切っている。

一方、フレンダの向かいに座っている、ふわふわしたワンピースを着た十二歳ぐらいの絹旗最愛という少女は、そうした他人の行動を一切気に留めず映画のパンフレットに目を通している。

「上海黄龍電影カンパニーのC級ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。滝壺さんはどう思いますか？」

話を振られたのは絹旗の隣にいる滝壺理后という脱力系ピンクジャージの女の子。ソファ状の席にだらっと手足を投げ出したまま、どこども知れない所へ視線を彷徨わせている。

「……北北東から信号がきてる……」

彼女たちは『アイテム』。
学園都市の暗部組織で、主な任務は統括理事会を含む『上層部』の暴走の阻止。『グループ』や『スクール』などと同等の機密レベルの集団である。

「そう言えば聞いたー？第二位の話。なんか仕事でミスって借金背負ったらしいわよ」

「私はその借金のせいで住んでたマンション追い払われて冷蔵庫工場で超働いてるって聞きましたけど」

「結局、第二位にはその程度がお似合いって訳よ」

「大丈夫。私はそんな第二位を応援してる」

どうやら先日の一件は各方面に広まっているらしい。本当に冷蔵庫を作っているのかは定かではないが彼ならば瞬く間に工場長にまで上り詰めることだろう。

そんな取りとめもない話をしている四人の隣の席にウェイトレスが客を案内してくる。御門北斗と黒夜海鳥の二人である。

「こちらのお席になります。ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

「ほら好きなもの頼んでいいぞ。腹減ってるだろ？」

「…こんなことでこの前置き去りにしたのを許すなんて思うなよ。そもそも私はしばらく食べなくったって平気なんだ」

「ツンデレだなー。どこで教育間違ったのやら」

「ツンデレじゃない！…こ、この後一日付き合ってくれるなら許してやる」

「はいはい、仰せのままにお姫様」

その姿は仲のいい兄妹のような、妹が大好きな兄に構ってほしくて意地を張ってるような微笑ましい光景を連想させる。例によって黒夜は北斗の膝の上に座っているのだから尚更だ。

そんな光景を目にした麦野は先ほどとは打って変わり悪鬼もかくやという表情を浮かべる。

「ほくとぉぉおおお！！テメェ、この私を一カ月以上も放置しといてなにこんなチビといちゃついてやがんだあ！？」

「…沈利じゃないか。放置もなにもオレは連絡とれなくなったしフられたと思ったんだけどな」

「あれは仕事でついうっかりケータイを壊したからで…あの後買いなおしたケータイで暗記してた番号にかけてももう使われてないってのはどういうことだ！？」

「あぁ、オレもケータイ壊しちゃってねー」

もちろんタイミング良くケータイが壊れたなど嘘である。北斗は彼女一人につき一台のケータイを使っており、連絡がつかなくなる、別れた、飽きたなどの理由があるとすぐに解約している。今回のことは麦野には不幸なすれ違いと言えるだろう。もっとも北斗はちっとも気にしていなかったが。

「なあ北斗、コイツ誰だ？」

「麦野、こいつらはどこのどいつな訳よ？」

「じゃあお互いに自己紹介と行こうか。麦野もひとまず落ち着いて

さ」

「ちっ後で詳しく話聞かせてもらうからな！……私は麦野沈利、第四位よ」

「フレンダ＝セイヴェルンよ」

「絹旗最愛です……なんでアンタがここにいるんですか」

「…滝壺理后…」

「オレは第六位の御門北斗、沈利が世話になっているようだね」

「黒夜海鳥。…それはこっちのセリフだぜ絹旗ちゃんよお」

自己紹介のはずがなぜか二名の雰囲気が険悪だ。片方は後ろから北斗に抱きかかえられているので台なしではあるが。

「…『成績』もろくに出せなかった劣等性が、見ない間にずいぶんと超大きな口を叩くようになりましたね。第六位の威を借りて調子乗ってるんじゃないですか？」

「あっれえ？『暗闇の五月計画』の事言ってるう？」

ニヤニヤと笑いながら黒夜は北斗の膝から降り、絹旗に相対する。

「あんな研究者連中の都合のいい犬だった優等生の絹旗ちゃんに比べたら劣等性だったかもしれないねぇ。それに自分には守ってくれる男がいないからってひがんでんのかあ？」

「超殺すッ！」

「図星だからって逆ギレしてンじゃねェよォッ！」

最早二人の雰囲気は一触即発だ。昼間から大能力者同士のバトルが展開されようとしているこの店が哀れでならない。先ほどのウェイトレスなど今にも気絶しそうである。

「フレンダちゃんに理后ちゃんだっけ？よかったらアドレス交換しない？」

「…いいよ。よろしくね、みかど」

「そんなことより結局あの二人は放置でいい訳！？」

「放っておきなさい。流石に場所をわきまえる程度の分別はあるでしょ」

「ヤバくなったらオレが止めるさ。沈利も交換しなおそうぜ」

「そうね、今度は壊さないでよ？」

「ああ！？私のサバ缶が真っ二つに！？結局私に被害が来る訳よ」

「大丈夫、そんなふれんだを私は応援してる」

窒素コンビの二人とは違ってフレンダを除く三人は実にマイペースであった。

## 第三話（後書き）

なんとか第三話を書きあげることができました！

数あるとあるＳＳの中でもむぎのんが元カノなんて小説を書いた人は他にいないんじゃないでしょうか。

ちなみにこのままむぎのんとの修羅場が発生するのかそれともヨリを戻すのかはまだ決めていません。

ただはっきり言っておくとするとこの作品のメインヒロインは黒夜です！

作者の趣味です。

垣根ェ…

## 第四話（前書き）

あとがきにアンケートがありますのでご協力ください。

# 第四話

「すまない、連れが迷惑をかけたな」

「悪いのは私じゃない、コイツだ」

「責任転嫁だなんて超無様ですね」

「やンのかァッ！？」

「超ボコボコにしてあげますよ！」

「はいここで吸収ー」

「「うっ…」」

ここは第三学区にある高層ビルの一角、アイテムの隠れ家の一つであるＶＩＰ用のサロン。
年間契約の貸し切り個室で、『二つ星』以上の会員証ランクがなければ借りる資格すら与えられないという、軽く３ＬＤＫを超える広さを持つ最高級な感じの部屋である。
ちなみに北斗も一部屋借りており、主に異性関係に使用されている。
一体いくつ部屋を借りているのか問いたい。

先ほどまでファミレスにいた6人だが、黒夜と絹旗の乱闘のせいで店に深刻な被害が出ており、警備員が駆けつけてくる前に逃げ出してきたのだった。

「結局なんでコイツらまでここにいる訳よ？しかもちびっこ二人を膝の上にロリハーレムつくってるし」

「私が連れてきたのよ。詳しい事情も聞きたかったしね。アンタらも話が聞けてちょうどいいじゃない」

「コイツらを抱えてるのはまた暴れられても困るからオレの能力で抑えるためだよ。まぁわざわざ密着する必要はないんだが…役得ってことで」

「離せこのロリコン！…力が超抜けていく！？」

「力を入れる度に吸いとってるからな。ほら暴れるから下着が丸見えだぞ？」

「超死ねぇぇぇ！！」

「…海鳥とは違ってオマエは可愛らしいパンツ穿いてんだな。うん、これはこれで悪くない」

「うぅっ超汚されました…」

力が入らないのかもぞもぞと暴れたせいか、絹旗のワンピースの裾はもともとギリギリのラインだったこともあって捲れ上がっており

下着が丸見えになっている。それをヤクザ風の男が堂々と見て、あまつさえ感想まで言っているのだから変態以外のなにものにも見えない。絹旗にいたっては顔を真っ赤にさせて体を震わせている。

「まったくなにをやっているのよ」

「絹旗がいじられ役だなんて珍しい訳」

「…そんなみかどは応援できないかも」

「（北斗は子供パンツも好きなのか…今度穿いてみよう）」

平和である。

しばらく北斗の腕の中でもがいていた絹旗だったが、ようやく無駄を悟ったのか抵抗をやめぐったりとしている。相変わらず下着は見えたままだ。

「ようやく静かになったな。それで沈利は何を聞きたいんだ？」

「まずはそのガキとの関係を聞かしてもらおうかしら？」

「海鳥（コイツ）はウチ（グループ）の構成員だ。少し面倒見てやったら懐かれてな？ようするに沈利、お前と同じようなもんだよ」

「麦野の面倒も御門が見た訳？」

「ああ、沈利と出会ったのはかなり前でな。あの頃はまだお嬢様然としてて可愛らしかったぞ」

「麦野が可愛らしいお嬢様！？今では考えられない訳よ」

「ケンカ売ってんのかフレンダァァアアア！！あんまり舐めた口きくと真っ二つにすんぞ！？」

「死亡フラグ！？」

「ならフレ／ンダだな。これからはンダと呼ぶことにしよう」

「なんで下半分！？確かに自慢の美脚だけど！？」

「やっぱりフレンダにはいじられ役が超似合ってますね」

「…おいコイツいじられてるのに目輝かせてんぞ？」

「ドMなんだろ。海鳥はこんな風にはなるなよ？」

「大丈夫、そんなふれんだでも私は応援してる」

「私はノーマルな訳よ！って落ち着いて麦野ー！？」

「逃げんなよフレンダァァアアア！！！！」

照れ隠しか原子崩しを放つ麦野とそれを必死に避けるフレンダ。そしてそれを面白そうに眺める４人。しかも滝壺はさり気無く北斗の後ろに避難している。

混沌とした光景だった。

## 第四話（後書き）

お待たせしました第四話です！

しかし人数が多いと書くのが大変ですね。
とくに滝壺なんか積極的に会話に参加する方じゃないので影が薄くなってしまって…
作者の力不足を嘆くばかりです。

さて今回はアンケートを取りたいと思います！
未だ継続中のアイテム攻略ルートですがどのキャラをメインに書いてほしいですか？
全員書くとなると日常パートばかりでストーリーを楽しみにしていらっしゃる方々に不評なのではと思いまして；；

1. 日常パートのなにが悪い！全員しっかり書け！
2. すでに攻略済み（？）な麦野
3. ロリコン上等！子供パンツな最愛ちゃん
4. ドM疑惑浮上中のフレ／ンダ
5. ■　■並みに影の薄い滝壺
6. アイテムなんか放っておいて他のキャラにしろ！

ちなみに6番を選ばれますとほとんど描写も無しに攻略されたり登場しなくなったりしてしまいますのでご注意ください。

では活動報告、または感想にアンケートの記入をお願い致します。

次回は特別番外編～北斗と海鳥のお正月～です。
お楽しみに！

## 特別番外編～二人のお正月～（前書き）

明けましておめでとうございます！
今年も「とある茨の禁書目録」をよろしくお願い致します！

## 特別番外編～二人のお正月～

二〇一二年一月一日元旦。
新年最初の日、科学偏向の街である学園都市といえどもこの日ばかりは学生、研究員の区別なくお正月気分を味わっている。そんな学園都市の第七学区にあるマンション、最上階一フロアを丸ごと占める超高級な部屋。御門北斗の住まいであるそこに御門北斗と黒夜海鳥の二人はいた。

「明けましておめでとう、海鳥」

「明けましておめでとう、北斗」

「しかし私たち暗部連中にとっては明けましても何もないだろうに」

「そんなこと言ってもオレが用意した振袖着てくれたんだな。とても似合ってるぞ」

「ちっ違ぇよっ！これはその……着る服がなくて仕方なくだな…」

「あとでアレイスターに『滞空回線（アンダーライン）』のデータ貰っとかなきゃな」

「ヤメロォォオオオ！！」

黒夜が着ているのは黒地に白い花が散りばめられ金糸で刺繍のされた華やかな振袖だ。口では仕方なく着たようなことを言っていたがしっかり髪を結ってあるあたり抜かりない。頬を染めて照れていた時など破壊力抜群である。ちなみに北斗は茨が巻きついている様が描かれた羽織袴を着ている。…出入りでもあるのだろうか？

「ともかくお雑煮でも食べようか。あとはお餅を入れるだけだからすぐできるぞ」

「私はお餅一個なー」

「はいよ、ちょっと待っててくれ」

「「いただきます」」

「相変わらず北斗が作る飯は美味いな」

「まぁそれなりにはな。ほら、あーん」

「ちょっ…あ、あーん」

「やっぱりオマエは可愛いな」

「何言ってやがる…ってもういいから！満面の笑みで箸近づけんな！！」

正月早々二人でいちゃついている。いつも通りの光景と言えばそれまでだが、ただのバカップルである。

「さて、飯も食ったし。…はい、お年玉」

「わーい！…って分厚い！？」

「とりあえず百万ほど入れといた」

「馬鹿だろ…私は別に金を恵んでもらうほど困ってないぞ」

「いいんだよ。こういうのは気分の問題なんだから。オレだってアレイスターからもらったぞ」

「統括理事長から！？」

「毎年もらってるな。レベル５は全員もらってるはずだぞ」

「キャラじゃねぇだろ…」

似合わない所の話ではない。実際もらった当初は罠の可能性を考えたほどである。

「…お年玉……コーヒーでも買ってくるかァ」

「これでようやくまとまった現金が……って借金明細！？…でもちょっと減ってる…」

「毎年欠かさずなんて統括理事長ってのも律義よねー」

「新作の服でも買おうかしら」

「お年玉だ！これも一年いい子にしてたからね☆」

「どこの誰だか知らんがありがとうっ！！！！！！」

「海鳥ー！甘酒飲むか？きな粉餅もあるぞ？」

「初詣行きたいからってなんで学園都市の外に…」

「学園都市の神社なんて厄除けとか言って除菌されるだけじゃないか。風情がない」

今二人がいるのは学園都市外にある神社。初詣に行こうと北斗が黒夜を引っ張ってきたのだ。

「おみくじも引いておこうぜ」

「はいはい、…私は中吉だな。健康に気をつけろだとさ。サイボーグ化してる私に言われてもなぁ」

「一応今度メンテナンス行っとけばいいんじゃないか？」

「それより北斗はどうだった？」

「オレは小吉だが……見なかったことにしておこう」

恋愛運：今年は女難の年。包丁や背後には気をつけましょう。

「…私は刺さないぞ？」

「疑問形かよ！オマエのことは信頼してるから心配なんてしてないさ」

「そ、そうか…私も信頼してる」

「なんか言ったか？」

「なんでもない！それよりお参りしよう！早く行こう！」

「おい、引っ張るなって」

「北斗は何を願ったんだ？」

「ん？刺激的な毎日が送れるようにってのと可愛い女の子と知り合えるよう、ってな」

「また浮気か！？私を放っておいておくなんて許さないからな！」

「オレがオマエを放っておくわけないじゃないか。それよりオマエは何を願ったんだ？」

「それは…って話をそらすな！大体北斗がいない日の朝はすごく寂しいんだからな！それなのにお前は女の匂いを残しながら帰ってくるし！！！」

「はっはっは、自爆してるぞ？海鳥は甘えたがりなんだから」

「黙れェェエエエ！！！！」

いつも通りな二人。黒夜は自爆して色々口が滑ったようだがここが魅力なのかもしれない。
なにはともあれ今年もいい年になりそうである。

――いつまでも『海鳥』『北斗』と一緒に過ごせますように――

## 特別番外編～二人のお正月～（後書き）

今回はかなり甘々な内容になりました。
ですが二人の願いも書けて作者としては満足です。

ただいま継続中のアンケートですが予想以上に集まりが悪く涙目です
ｏｒｚ
無理にとは言いませんが協力してもらえると幸いです。

## 第五話（前書き）

この主人公はホストのように甘い言葉を吐いて女を落とすのが基本ですが、
全員攻略鬼畜ルートを望んだ方がいたので少し強引な方法も取り入れていきたいと思います。

また、参考になるのでアンケートは継続します。
アンケートだけではなくこのキャラを絡ませてほしいなどありましたら感想の方へ。

# 第五話

深夜の学園都市。完全下校時刻をとうに過ぎ、出歩くものがいなくなった街を黒塗りのワンボックスが走り抜けていく。

「それにしてもなんで『アイテム』の仕事にアンタ（グループ）が超ついてくるんですか。しかもアイツを滝壺さんに預けて。捨てられた子犬みたいな目してましたよ」

「最近仕事が少なくてな、ちょっと暴れたかったんだよ。オレの能力は便利だが面倒もあるのさ。それと海鳥を置いてきたのはアイツに知り合いを増やして欲しいからだ。初対面で掴みきれてないが滝壺ならいい関係を築いてくれるだろうよ」

「私たちみたいな暗部にはその優しさは命取りですよ。もっとも実験の時に研究者連中を皆殺しにしたアイツにとっては超余計なお世話なんじゃないですか？」

「命取り、ね。わかってるさ、所詮は偽善に過ぎない。もし邪魔になるようなら躊躇いなく切り捨てる。まぁアイツはオレが死んだら仇取ってから自分も死ぬなんて言ってるけどよ」

「あの黒夜海鳥が？超信じられませんね」

「そう思うのも無理はない。だけどアイツは不安定なんだよ。実験で『攻撃性』を植えつけられたせいか本来の黒夜海鳥の人格に乖離がおきてしまっている。『防護性』のオマエになら多少はわかるんじゃないのか？」

「それは…」

「能力使用時に口調が変わってしまうのがいい例だ。本人が意図せずとも思考が攻撃的になってしまう。これでも最近は安定した方なんだぜ？なんせオレが引き取った当初なんか他人に近寄ろうともしないで部屋の隅で膝を抱えてた。そのくせオレが視界に入ってないと不安になるのか風呂やトイレにまで入ってきやがる」

「…想像できませんね。私が見た彼女は他人を嘲笑っているような超嫌なやつでしたし」

「自分の内心を他人に見せたくなかったんだろうさ。不器用なんだ、どうしようもないくらいな。だから絹旗、オマエもたまにでいいからアイツと世間話でもしてやってくれよ。真実同類と言えるのはオマエくらいなもんなんだから」

「…努力はしてみます。笑って話す自身は超ありませんけど」

絹旗自身は『防護性』という比較的影響の少ない部分を植えつけられたため黒夜の苦悩を完全に理解できたとは言えない。しかしそれでも思うところがあったのか北斗の頼みに対して神妙に頷いた。

「なんならオマエもうちにくるか？幸いにして部屋は余ってるしな」
「生憎ですけどロリコンと住むのは超遠慮します」
「遠慮すんなよ、手続きとか面倒なことはやっといてやるからさ」
「ですから私は遠慮するとさっきから超言ってるじゃないですか！」
「おっとそんなことより目的地に着いたみたいだぞ？」

先ほどの暗い雰囲気がなかったかのように騒いでいた二人だったがどうやら車が目的地に到着したようである。場所は廃棄された区画にある路地裏だ。二人は車から降り軽くあたりを見回している。

「今回の仕事はここを根城にしている武装無能力集団（スキルアウト）の壊滅です。逃げ出す奴は放っておいてもいいらしいので超楽な仕事ですね」
「なら派手に一発かました後集まってきた輩を叩くって感じかな」

「それが無難でしょうね」

「じゃあ絹旗はオレの後ろにでもいてくれ」

そう言って北斗が取りだしたのは缶ジュース程度の大きさの物体、スタングレネードだ。それを３０メートル程奥に投げ、着弾と同時に爆音と閃光が路地裏を駆け抜ける。相当な衝撃のはずだが二人は涼しい顔をしている。

「爆音が私たちまで届いていない？いえ、能力で吸収したんですか」

「正解。わざわざあんなうるさい音聞くことないだろ？」

「どんな仕組みかは知りませんが超便利な能力ですね」

「もちろんデメリットもあるがな。……っと集まってきたようだぜ？」

今の爆音と閃光を聞きつけたのかスキルアウト達がワラワラと集まってくる。それを確認した絹旗は近くに乗り捨ててあったバイクを軽々と持ち上げると前方の集団に向かって投げつけ、自身もそれを追うように突っ込んでいく。北斗は投げつけられたバイクが衝突すると同時に一瞬でその場から消え去り、次の瞬間には頭部を失った死体が次々と生産されていく。一瞬前まで北斗がいた場所のコンクリートが陥没していることから高速で踏み込み頭を潰したのだろうが最早人間に出せる限界の速度を大きく超えており、なおかつその身には返り血など一切ついていなかった。

それ以降も二人は縦横無尽に暴れまわり、スキルアウト達は碌に抵抗もできぬまま殺されていく。悪夢はまだまだ始まったばかりである。

再び深夜の街を走るワンボックスカー。その中に先ほどの虐殺をおこなった二人はいた。

「あっけなかったなー」

「所詮は無能力者ですからあんなものでしょう。それより早く帰って超寝たいです」

「そうだな。海鳥には先に帰っておくようにメールしといたしオレも風呂入ってさっさと寝るかね」

「そういえば御門はどこに住んでるんですか？」

「普段はいくつか所有しているセーフハウスを渡り歩いてるからあまり使ってないが第七学区にある高級マンションだよ。窓のないビルの近くに建ってるやつ」

「…学生の住む場所じゃ超ないですよね」

「いいんだよ金なら有り余ってるんだし」

「麦野もそうでしたけどレベル５っていうのは金銭感覚が超おかしいです」

ちなみに北斗が住んでるマンションは軽く億を超えている。いくら報酬の高い暗部の仕事といえども到底無理なはずなのだが…不思議である。

「どうやら御門のマンションについたようですね。…では私はこれで失礼しますね」

「なに言ってるんだ？うちに住むって言っただろ？」

「はい？あれは超遠慮すると…」

「もう手続きも済まして絹旗の荷物も運び入れさせてあるぞ」

「……はぁ！？いつの間に！？ってそれよりなんで私の荷物が！？」

「どこに住んでるか調べさせて運ばせたんだよ。言っとくがもうオマエの部屋は解約しちまったぞ」

「なんてことするんですか！！…今日からどこに住めば…」

「だからうちに住むんだって。ほら行くぞ」

「ちょっ！？引っ張らないでください！自分で超歩きますから！って抱きかかえるなー！！！」

どうやら絹旗は北斗の家に住むことに無理やり決まったようである。いつの間にそんなことをしていたのかは不明だが恐ろしく仕事が早い。この男は本当にロリハーレムでも築きたいのだろうか？他のアイテムメンバーへの説明が大変そうだ。特に麦野の。

「帰ったぞー！」

「おかえり北斗！なんか荷物が運ばれてきたけど一体……ってなんでソイツを抱きかかえてんだ？」

「今日からコイツもここに住むことになったから」

「なんだそれ！？どういうことだよ！！」

「私にだっって超わかりませんよ…いきなり連れてこられたんですから…」

「あぁ…まぁ北斗だからな。……諦めろ」

「超不幸です…」

こうして北斗の家に住人が一人増えたのであった。

## 第五話（後書き）

オマケ

「海鳥ー風呂入るぞー」

「今準備するから待ってくれ」

「一緒にお風呂とか超子供ですね」

「何言ってんだ。オマエも一緒に入るんだよ」

「え？ぬっ脱がさないでー！？」

「うぅ、もう超お嫁にいけません」

「ならオレが貰ってやるさ。オマエも湯船につかれよ」

「わざわざスペース開けてやってるんだから早く入れよな」

「わかりましたよ（……超大きいです…）」

「「（…見すぎだろ…）」」

オワリ

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第六話（前書き）

なんとかパソコン復旧完了！

前回のお風呂のせいかＰＶがすごいことに！？
お風呂のシーンが詳しく見たいという方が多くいればノクターンで
書くかもしれません（笑）

# 第六話

「…超知らない天井です。……そういえばここは御門の部屋でしたね」

何やら某汎用人型決戦兵器に乗っている少年のようなことを口走ったのは絹旗最愛。昨夜から御門北斗の部屋に（北斗によって無理やり）住むことになった少女だ。なお、ここは絹旗に与えられた部屋であり１２畳程の広さがある。

「まったく。お風呂だけでも超一杯一杯なのに一緒に寝ようだなんて無理に決まってます」

一緒にお風呂は避けられなかったがどうやら一緒に就寝は避けられたようである。

「けど誰かと一緒に入浴するなんて研究所の洗浄以外では超初めてでしたね……案外悪くないかもしれません」

昨夜は恥ずかしさやらなんやらでパニック状態に陥っていたが冷静

になればどこか感じ入るところがあったようである。もっともパニックの一因には衝撃的なものを見てしまったせいもあるだろうが。

「御門も暗部にいる割には悪い人間でもないようですし……兄がいたらあんな感じだったんでしょうか。…一緒に寝るくらいならしてあげてもよかったかもしれませんね」

「なら今夜からは一緒に寝るか、妹よ」

ぎぎぎっと壊れたロボットのように振り向いた絹旗の眼に映ったのは部屋の扉にもたれかかった北斗の姿。さすがに自宅ではスーツ姿ではなくスウェットを着ている。

「…いつから聞いてたんですか？」

「超知らない天井です、からだな。新しい生活を気に行ってもらえたようでなによりだ」

「起きた時には確かに部屋に誰もいなかったのに！？」

「聴力を強化して部屋の外で聞いてた。能力のちょっとした応用だ」

「能力の超無駄遣い！？」

「別にいいだろ。それより朝食にするから顔洗ってこい、寝癖がついてるぞ」

「超洗ってきます！」

「ああ、言い忘れていた。おはよう最愛」

「…おはようございます（私の名前…）」

名前で呼び捨てにされた絹旗だったが不思議と嫌な感じはしなかった。そのことに内心首を傾げながらも絹旗は寝癖をなおすために洗面所に走って行った。

「「「ごちそうさまでした」」」

「なかなか美味しかったです。それにしてもアナタはいつも御門の膝の上で食べているんですか？やっぱり超子供ですね」

「なんだぁ？絹旗ちゃんってば羨ましいのかにゃーん？」

「べ、別に羨ましくなんか超ありませんから！」

「その反応は怪しいねぇ。言っとくがここは私の定位置だからな」

「だから違いますって！」

黒夜をからかおうとした絹旗だったが逆に黒夜にニヤニヤとした顔でからかわれ顔を真っ赤にしていた。本当に羨ましかったのだろうか。

「二人とも仲良くしろよ。それで絹旗は今日なんか予定でもあるのか？」

「今日は仕事も無いんで映画でも超見に行くつもりでしたけど……それがなにか？」

「いや、オレ達も今日は暇でな。差し支えなければついて行ってもいいか？」

「別にいいですけど私が見るのはC級映画なのでアナタには超つまらないと思いますが」

「暇つぶしなんだから構わないさ」

「私は北斗が行くならついていく」

「それに意外と面白いかもしれないしな」

「そうです！そもそもC級映画というのは……」

なにやらC級映画について語りだした絹旗、それを聞く二人は少し引き気味である。ともかく三人は映画を見に行くことになった。

現在三人がいるのは第七学区にあるとある映画館。上映開始まで間もないというのに映画館の中には北斗達三人しかいない。

「…ずいぶんと空いてるんだな」

「いつも超こんな感じです」

「なあ北斗、ポップコーン買っていいか？」

「買ってくるか。最愛も食べるか？」

「じゃあ塩味で。キャラメルなんてのは超邪道です」

「オレはキャラメル好きだけどなー」

ポップコーンを買ってきたところでちょうど映画が始まった。どうやら日本を舞台にした恋愛モノらしい。しかし出演者は全員外人であり、無駄に多国籍である。

〜十分経過〜

「（超流石です。やはりC級はこうでなくては）」

「……（なんでホラーでもないのにヒロインがいきなり幽霊と戦ってるんだ？しかも巫女服を着ときながらロザリオを連射する銃とか……両サイドにケンカ売りすぎだろ）」

「…ふみゅ……北斗…そこはダメ……」

「（何の夢見てるんだ）」

～三〇分経過～

「……（恋愛って幽霊同士のだったのか！？落ち武者の霊とか説明されてたが……何故に落ち武者ヘアーの板金鎧）」

「……北斗ぉ……ベッドの上でじゃなきゃ嫌……」

「（映画より寝言の方が超気になります）」

～一時間経過～

「……（幽霊が巨大化した！？しかも戦闘機とバトルしてるし……幽霊合体ってなに！？）」

「……自分で動けだなんて……」

「（やはり二人は超そういう関係なんですかね）」

～映画終了～

「突っ込み所が満載だったな…」

「…よく寝た」

「駄作でしたね（寝言が気になって映画どころじゃ超ありませんでした……私もあんなことされてしまうんでしょうか）」

結局まともに映画を見ていたのは北斗だけだったようだ。黒夜はまだ眠そうにしており、絹旗に至ってはなにやら妄想でもしていたのか頬がほんのり紅潮している。

「じゃあ夕飯の材料でも買って帰ろうか。何が食べたい？」

「北斗が作るものなら何でもいい」

「食べられるものなら超何でもいいです」

「ならオムライスでも作ろうかね」

二人の手を引きながら歩いていく北斗。本人は引率でもしている気分なのだろうが傍から見れば誘拐現場にしか見えなかった。

夕飯も食べ終わり三人はそれぞれ思い思いに過ごしていた。なお、オムライスにはケチャップでそれぞれの名前が器用に書いてあったことを追記しておく。

「さて、オレはちょっとやることがあるから少し外すけど二人ともケンカするなよ？」

「それは絹旗ちゃん次第だな」

「しませんよ」

「ならいいんだけどな」

そう言うと北斗はケータイを片手に自室へと入って行った。この部屋は北斗以外は例え黒夜であろうとも入ることを許されていない完全なプライベートルームである。
そして残された二人はというと…

「「……」」

ひたすらに無言だった。今まで会話が成立していたのは北斗が間に

入って緩衝材になっていたからであり、むしろ二人だけでは険悪な雰囲気すら漂っていた。

「ひとつ聞きたいんですが……アナタと御門はその…超そういう関係なんですか？」

「あん？ああヤることはヤってんな。だけど恋人って関係じゃないぞ」

「恋人じゃない？」

「私は北斗の所有物だ。北斗が殺せと言えば殺すし死ねと言われれば死ぬ」

「所有物……御門はそんなこと超望んでません！私たちを会わせたのだってアナタに自分以外の人との関わりを持ってもらおうと…」

絹旗の言葉を遮って黒夜が雰囲気をがらりと変えて喋りだす。

「お前に北斗の何がわかる。北斗がそう言うなら他人とも関わるさ。だけどそんなのは北斗の一面に過ぎない。北斗は私の全てだ、このどす黒い真っ黒な『闇』の中でなお暗くて深い唯一の存在。私を引きこんで離さない深淵の君、茨の王。私が吸い殺されて枯れ落ちるまでこの命は北斗のためだけに在る」

「……」

「それに勘違いしてるようだから言っておくが北斗も暗部の人間だぞ？しかも『中核』を成すグループのリーダーだ。そんなのに優しいだけの男がなれるわけないだろ。そもそも北斗は私達すら『ヒト』としてなんか見ていない、物だよ。自分の所有物を愛でているに過ぎない」

「……そんな…」

「私はそんな愛でも構わない。物として見ていようがその他大勢（実験材料）じゃない私だけを見てくれている。それに女としても愛してくれてるんだ文句はないさ」

「……私は……」

「お前も北斗に惹（引きつけられてる）かれてるんだろ？おいおい何でわかったかなんて聞くなよ。私とお前は似ている。あのくそったれな実験の後どう過ごしてたかなんて手に取るようにわかる。抗えないよなぁ？例え物としてでも絹旗最愛を見ているんだから。この闇の中でそんな奴は北斗くらいなもんだ」

「……確かに私が御門に惹かれてるのは認めます。それを知った貴女は私をどうするんですか？邪魔者として超殺しますか？」

「いいや？私は別に北斗に女が増えようと気にはしないさ。ただ北斗に害を成すようなら排除する」

「超肝に銘じておきますよ」

「まぁそんな貧相な体じゃ北斗を満足させられないだろうがな」

「あなただって私と超変わらないじゃないですか！！」

「私はテクニックがあるからいいんだよ」

「それくらいちょっと練習すれば超余裕です！」

「どうだかねぇ。言っとくけど北斗は他にも女がいるからな？」

「……え？……それでも他の女には負けません！！」

「まぁ頑張れよ（何が惹かれてるだ。完全に惚れてるだろ）」

「まずは御門を超誘惑するためにさらにワンピースの丈をギリギリのラインにしなければ！」

「……もう裸も見られてんだろ…」

北斗の自室。入るためには静脈認証とパスワードが必要であり、核シェルター並みの強度を誇る部屋でだ。もちろんこと盗撮や盗聴などの防諜は完璧である。そこで北斗は携帯電話で誰かと話をしていた。

「ああ、わかっているとも。もう近くまで来ているんだろう？ならアンタのためであろうともやってやるさ、そもそもアンタがいなけ

ればオレは生きていけないんだから。それに『オリジナル』の事が知られたらオレを殺そうとするヤツが大量に現れる。面倒はごめんだからな」

しばらく電話相手と話していた北斗だが用件は済んだのか電話を切り、天井を見上げる。その眼はここではないどこかを見ているようだ。

「時は満ち、物語がの開始を告げる鐘が鳴り響く。そして『プラン』は進んでいく、……だがオレには関係ない。オレはこの世界で生きていくだけだ」

その呟きは誰にも聞かれることなく闇の中に溶けていった。

## 第六話（後書き）

～オマケ～

「そろそろ寝るかね。最愛、一緒に寝るか？」

「そ、そんないきなりだなんて超心の準備が…」

「残念なお知らせだが私も一緒だよ。絹旗ちゃんは純情だねー」

「なっ！？初めてが三人なんて……」

「何やってんだ？いいから早く寝るぞ」

「結局ただ寝るだけなんですね……」

「ん？なら抱きしめて寝てやるよ」

「え！？超待ってくださ……」

「なら私は北斗の背中で我慢するか」

「……（い、息が耳に！？それに手が胸に当たってて……変な気分に…）」

「……（北斗の背中温かいな…）」

「（この体勢寝辛いな……抱きしめなけりゃよかったか）」

～オワリ～

お待たせしました！第六話です！
本当は今日のお昼頃にはアップできる予定だったんですがパソコンのデータが破損しまして……消えたレポートどうしよう……

それはともかく今回は見所が満載ですね！
最後の電話相手とは一体！？
まぁバレバレですね（笑）

それでは感想、ご意見、誤字報告などお待ちしております。

## 番外編～黒夜海鳥の過去～（前書き）

毎日更新できませんでしたｏｒｚ

前話で黒夜の狂信的な面が見えてきたのでそれに至る過程を書きたいと思います。

もしかしたら気分が悪くなるかもしれませんのでご注意ください。

## 番外編～黒夜海鳥の過去～

私が覚えている最初の記憶は優しい両親の姿などではなく冷たい目で私を見下ろす白衣を着た男たちの姿だった。よく覚えてないが体中に機械を取りつけられていて苦しくて寒くて泣いていた気がする。

次に覚えているのは薄暗いトイレだけがある部屋。あの時はなんとも思わなかったが今考えると牢屋というのが一番近かったかもしれない。そこには私と同じ5，6歳くらいの子から9，10歳くらいまでの子供が詰め込まれていた。みんな生気のないがらんどうの目をしていて、私はそれがとても怖く見えていつも部屋の隅で蹲っていた。

毎日毎日実験室と部屋の往復。幼い私は何をしているのか理解できていなかったが喜んでいる大人達を見ていると私も嬉しかった。あんな笑いもしない気持ち悪い人たちと一緒にいるよりははるかにマシだった。大人達は私達とは違ってお互いの事を番号以外で呼んでいたのがその時の私は不思議でならなかった。

あの後聞いたところによると普通は名前というものを持っているらしい。私達は置き去り（チャイルドエラー）で実験材料だから名前は必要ないそうだ。な

んだかずるいと思ったのを覚えている。なんだか部屋にいる子供が減っているような気がしたが私は彼らが嫌いだったのでどうでもいいことだった。

ある日私に能力というものが使えるようになった。空気中の窒素を手のひらに集めて操れるらしい。能力の使用に必要なことは変な機械で頭に直接埋め込まれたので使用にはなんの問題も無かった。能力を使っての実験ばかりだからちょっと頭が痛かったけど頑張ると飴を貰えたから一生懸命やった。糖分を効率よくエネルギーに転換できるとか言ってたけどあんなに甘くて美味しいものは食べたことなかったから話も聞かずに夢中で食べた。超超言ってる女の子の方が一杯もらってるのが羨ましかった。

そんな日々が何年か続いていたけどある日研究所に真っ白な子供がいるのを見かけた。私より年上だったけど真っ赤な目もあって研究員が話してくれたウサギの特徴にそっくりだった。一方通行（アクセラレータ）とか呼ばれてたし可愛いのに目つきが悪かったから残念な人だと思った。目が光を失ってなかったから気になってたけど部屋には来なかった。年上の女の子が部屋からいなくなってたけどどこに行ったんだろう？

それからしばらくしたら研究員が実験の内容が変わると言ってきた。なんでもあの白い人の演算パターンを使って能力の効率化を図るらしい。これでさらに能力を使えるようになれるなら嬉しい。また飴もらえるかな？

……なにこれ？私の頭の中に誰かいる！？嫌嫌嫌、私の中に入ってこないで！ヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテ……

…………ヤメロって言ってンだろォが！！

この前の実験の後私の能力が少し変わった。『窒素爆槍（ボンバーランス）』といって手のひらから窒素でできた槍を生み出すことができるようになったらしい。…これでもっと壊せンなァ。実験からしばらく経つがなンでだか手当たり次第に壊したくなる。子供達を見れば殺したくなるし研究員を見れば引き裂いてやりたくてしかたねェ。ったく鬱陶しいンだよなァ、殺してやろォか？

……最近物騒なことが頭に浮かんでくる。私はこんなこと考えたりしない。誰も殺したくなんてない。でも私の気持ちなんか関係なく思考が攻撃的なもので埋め尽くされる。……怖いよ、誰か助けて……助けてくれねェなら殺しちまうぞォ！！

その日私は研究員達を皆殺しにした。能力で引き裂いたり貫いたりぐちゃぐちゃにしたり。実験材料のゴミもみんな殺してやろォとしたンだがどうやら何人かは逃げちまったらしい。もっとたくさン殺したいってェのにもったいねェ。もっと壊したい、殺したい、引き裂きたい、貫きたい、内臓や脳みそをぐちゃぐちゃにしたい。もっと、もっともっともっともっともっとモットモットモットモットモットモットモットモットモットモットモットモットモット……私に

殺させろォォオオオ！！！

「まったく、研究員と連絡が取れないから様子を見に行けと言われて来てみれば、いるのは狂乱した子供だけとはな」

その男はどこからか燃え広がった炎の中を悠然と歩いて私の前に現れた。高校生くらいだろうか、ダークスーツを身に纏い、無造作に伸ばした長髪をたなびかせて。何かしらの能力を使っているのか燃え盛る炎を自身を中心にして渦巻かせていた。

「オマエがこれをやったのか？愉快に暴れているじゃないか」

男はその見るだけで吸い殺されそうな奈落の如き光を湛える瞳を私に向けながら話しかけてくる。見るだけで、いやその場にいるだけで飲み込まれてしまいそうな気がした私はただ目の前の怖いものを消したくてがむしゃらに能力の槍を男に叩き込んだ。

「消えろォォオオオ！！！」

「いくら狂乱しているとはいえその歳でオレに立ち向かうとは見所があるな。オマエ、名は？」

私の全力だったはずなのに男は何事もなかったかのように歩み寄ってくる。それが怖くて恐ろしくて私はただ震えながら見ているしかなかった。

「……Ｎｏ．０１６５」

「名前がないのか。ならばこれからは黒夜海鳥と名乗れ。この黒い『闇』の中を渡る鳥のように。ここでオレに出会ったことは僥倖だ。オレの物になることを許そう」

「あっ……」

私の意識はそこで途絶えている。最後に見えたのは男の瞳に映る深淵と黒い茨だった。今にして思えばこの時から私は彼に引きつけられていたのかもしれない。

……目が覚めたのは白いシーツが敷いてあるふかふかしたベッドの上だった。研究所の部屋とは違って明るくて清潔でまるで現実感がなかった。私にはもったいないくらいだ。

「目が覚めたのかい？手荒な真似をしてすまなかった。どこか痛いところはないかい？」

そう言ってあの怖い人が部屋の中に入ってきた。研究所のときとは打って変わって優しく話かけてきたが私は怖くて布団を被って震えていた。彼はそんな私にお構いなしにいろんなことを説明してくれ

た。彼の名前は御門北斗というらしい。あれでも１４歳だというんだから絶対おかしい。これから私は彼と一緒に住んで暗部というところで働くことになるらしい。

あれから彼と一緒に住むことになったわけだがやっぱり私は怖くて彼がいるときは部屋の隅で震えていた。彼はそんな私の姿を見て笑っていたけれども。ある日彼は私を初めて仕事に連れて行った。人を殺すらしい。……お前らみンな殺してやるよォッ！

能力を使うといつも誰かを殺したくて仕方がなくなる。私はそれが怖くて布団の中で泣いていた。すると彼が部屋に入ってきて何も言わずに私を抱きしめてくれた。いつもは怖くてまともに見ることもできなかったけどこの時はすごく安心して気付いたら眠ってしまっていた。起きた時も彼が抱きしめてくれていてとても嬉しかった。ありがとう北斗。

それから私は北斗と離れたくなくて毎日一緒に寝たりお風呂に入ったり、時々仕事もしていたけどとても幸せな時間だったと思う。そんな日々を一年以上続けて、やっぱりあの研究所での光景は混乱していたからで北斗は優しい人だったんだと思っていた。けどやっぱり北斗は優しい人なんかじゃなかった。

「さぁ、もう仕事で人を殺すのにも慣れてきただろうから今日は何の罪もない一般人をこの包丁で殺してみようか」

北斗が彼女だっていう女子高生を家に連れてきた。とてもいい人で私のことも可愛がってくれて手料理まで食べさせてくれた。なのに北斗は私にそんなことを言ってきたのだ。彼女さんは冗談だとでも思っているのか笑っている。私も冗談だと思いたかった。

「しっかりと心臓を狙うんだよ」

私の手に包丁を持たせて笑顔で笑いかけてくる。流石に彼女さんも何かがおかしいことに気付いたのだろう、顔が青ざめている。

「で、でもこの人は北斗の彼女なんでしょ！？」

「もう飽きたからいらないんだよ。それに海鳥の相手にぴったりだと思ってね」

彼女さんは逃げようとしたが北斗に両腕を拘束されて私の目の前に連れてこられる。

「ねぇ冗談でしょう！？北斗くんったら悪ふざけが過ぎるよ！？」

「オレは本気だよ？……さあ海鳥、早くしなさい」

「海鳥ちゃんもなんとか言ってよ！？この人を止めて！」

「……」

「いやっ！誰か、誰か助けてぇぇぇぇ！！！」

私は何も言うことが出来なかった。彼女はどうにかして逃げ出そうと暴れている。無駄だ、そんなことをしたって北斗からは逃げられない。悲鳴がうるさいほど聞こえてくるがまるで現実感がなかった。

「さあ、海鳥」

嫌だ

「さあ！」

嫌だ殺したくない

「さあ！！」

殺さなかったら私も捨てられるんだろうか

「さあ！！！」

捨てられたくない…

「殺せ！！！！！」

「あああああああああああああああああああああっ」

初めて能力以外で人を殺した。
包丁が刺さった胸からは鮮血が溢れ出し私の体を濡らしていく。北斗は冷たくなっていく元彼女を私の方に押しやると高笑いをあげはじめた。彼女さんの体はだんだん冷たくなってきていて、その驚愕と憎しみに彩られた表情が私の心を破壊した。手にはまだ胸を刺した時の感触が残っている。

その夜私は北斗に抱かれた。血まみれのままで彼女の死体を目の前にしながら。
すごく痛かったけど北斗を深く感じられてとても嬉しかった。こんなときに喜びを覚えるなんて、私はなんて浅ましい女だろう。生気を失った彼女の目が私を非難しているように思えた。

「海鳥。オマエはオレの所有物だ。離れることは許さない。勝手に死ぬことも許さない。オレの言葉を聞いてオレのために生きろ。オマエはオレが初めて手に入れた物なんだから」

そう私は北斗の所有物。
最初に言われていたではないか。それを忘れて家族ごっこをしていた私が悪い。
私は北斗の最初の物。
ならば北斗の言葉に逆らうことはできない。あの女が死んだのだって北斗に飽きられたのが悪いんだ。だから私は悪くない。
私は黒夜海鳥。
この黒い夜のような闇の中を北斗に先導されて飛び続ける海鳥なのだから。

その後も私は何かに脅えるように、何かを言い聞かせるように北斗との行為に溺れていった。

北斗の部屋に新しい住人が増えた。
あの超超言ってた女の子、絹旗最愛だ。どうやら私と似ているから北斗が拾ってきたらしい。二人は楽しそうに笑っている。私は北斗に飽きられてしまったのだろうか。嫌な想像が頭をよぎるが頭を振ってそれを打ち消す。

「北斗！私を抱きしめてくれ」

「どうしたんだ？今日はやけに甘えん坊じゃないか」

「超甘えん坊なんですねぇ」

「羨ましいんだろ絹旗ちゃんは」

「ち、違います！」

「仲良くしろよ二人とも」

私がこんな奴に劣っているはずがない。今までずっと北斗の役に立ってきたんだ。
なあ北斗。私はお前の言うことならなんでも聞く。他に女を何人侍らせようが構わないし、統括理事長だって殺せと言われれば殺すし死ねと言われたら喜んで死ぬ。そのために体中改造してまで役に立とうと力を求めたんだ。だから…

だから私を捨てないでくれ

## 番外編～黒夜海鳥の過去～（後書き）

気分の悪くなった方は申し訳ありません。
黒夜の過去を描く閑話でした！

本編の前にこんなことがあったんですねぇ…

まさに外道！な主人公ですがこれでも彼なりに黒夜を愛しているのです。
どう考えてもやりすぎですが（笑）

しかし研究所時代の描写がひど過ぎますねー
陰惨さのかけらも表現できていません。
でも純真な黒夜を書くにはこの時代しかなくて…作者の腕不足を嘆くばかりです。

この話批判きそうだなぁ……

じつはこの話は黒夜に
「他に女を何人侍らせようが構わない」

というセリフを言わせたいがために生まれました（笑）

## 第七話（前書き）

前話に力を入れ過ぎたせいか黒夜以外が絡む姿を考えられずに投稿が遅れました。

アイテム攻略ルート終わったらひたすらいちゃいちゃさせよう（笑）

# 第七話

学園都市にあるとある喫茶店、そこに無気力無表情少女こと滝壺理后はいた。どうやらプライベートのようであり、アイテムの面々はいない。そこで滝壺は何をするでもなく座席に身を預け視線を虚空に向けている。誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。

「ごめん、待たせちゃったかな？」

「ううん、大丈夫。そんなに待ってない」

やってきたのは御門北斗。今日は黒夜を連れてきておらず1人のようだ。滝壺は北斗を見やると相変わらずの無表情で答える。

「そうなのかい？それにしては紅茶が冷めてしまっているようだけど」

「ちょっと早く来すぎただけだから問題ない」

「それでも待たせちゃったのには変わりないから、せめてここのお代はオレが持つよ」

「ありがとう、みかど。それで今日は私になんの用？」
「この前海鳥を預かって貰ったからお礼でもと思ってね。迷惑をかけていなかったかい？」
「大丈夫、大人しくしてたよ。でもお礼なんて別にいいのに」
「お礼と言っても食事を奢るくらいしかできないけどね」
北斗が彼女を呼びだしたのはお礼をするためのようだ。もっともお礼にかこつけて食事に誘っているようにしか見えず、それは滝壺も察したようだった。
「……わたしと食事がしたいの？」
「さすがにばれちゃったか。滝壺はオレとデートするのは嫌かな？」
「私は別にいいけど、むぎのはいいの？」
「これは痛いところをつかれたな。でもオレにとっては沈利とは別れたつもりだったし、滝壺が可愛かったからね。君にとても興味があるんだ」
話を逸らして誤魔化している。しかもまだ一度しか会っていない相手に面と向かって言うセリフではないだろう。

「でも私といたって楽しくないと思うけど」

「滝壺みたいな美少女と一緒ならそれだけで楽しいよ」

「みかどは女たらしなんだね」

「はは、手厳しいな。……食事までまだ時間があるから少し付き合ってもらえないかな？」

「どこへ行くの？」

「それは行ってからのお楽しみさ」

そう北斗が言った後二人は連れ立って喫茶店を出て行った。女たらしだということが見破られていたが大丈夫なのだろうか。そしてその二人の後を追う小柄な人影があった。

「私には超手を出してくれないのに滝壺さんとはデートするなんてっ」

二人がやってきたのは高級ブティック。ちなみにここは第七位を除いたレベル5御用達である。当然ながら値段も相当な額になる。

「服を買うの？」

「滝壺のをね。予約しているのがドレスコードのあるレストランだからオレはこの格好でいいとしても滝壺はちょっとね」

北斗が苦笑しながら話す。それもそのはず、滝壺の格好はいつも通りのピンクジャージ姿だ。

「…私はジャージでいいのに」

「まぁたまにはいいじゃないか。代金はオレ持ちなんだしさ」

「……今日だけだからね」

「ありがとう。じゃあ採寸してもらって衣装を選ぼうか」

「…とても似合っている。思わず見惚れてしまったよ」

「そ、そうかな？こんなドレス着たことないから少し恥ずかしい…」

滝壺が着ているのは淡いピンク色のフォーマルドレス。肩口などは大胆に露出しており、普段は隠されているスタイルの良さがでている。やはり着なれないせいか、それとも肌を多く見せているためか頬をうっすらと染め恥ずかしがっている。どこぞのバニー好きが見たら思わず鼻血が出てしまうのではないだろうか。

「あなたに恋をした。あなたに膝まづかせていただきたい、花よ」

「大げさだよ……本当に似合ってる？」

「もちろんさ！元がいいんだから普段から着飾ればいいのに」

「……考えておく」

「ではお嬢さん、お手を。不肖私がエスコートさせていただきます」

「…うん」

北斗は仰々しく膝をつくと恭しく滝壺の手を取りその手に口づけする。いきなりのことに滝壺は顔を真っ赤にして慌てふためいている。それにしても北斗、キャラが変わりすぎである。この分だと結婚詐欺師もいけるのではないだろうか。そしてその光景を服の陰に隠れながら見つめる影。

「やっぱり、やっぱり超胸なんですかっ！」

「お客様、その手に握っていらっしゃる服は皺になってしまったので買い取りいただくことになりますが…」

「…いくらですか？」

「４０万円になります」

「え〝っ」

「（最愛のやつなにしてるんだ？）」

場所は変わって二人がいるのはレストランの一室。３６０度全方位モニターによって自由に風景が変えられる部屋であり、ここで食事をするには相当の値段がかかる。北斗が今日だけでいくら使ったのか見当もつかない。現在この部屋の光景は宇宙に設定されており二人の頭上には満天の星が輝き、眼下には美しい地球が見える。

「綺麗…」

「この映像は現在衛星が撮っているものとリンクしているんだ。この光景の中にオレ達もいると思うと不思議な気分になるね」

「うん…」

滝壺はこの光景に圧倒されているのか言葉が少なくなっている。出された料理の味もろくにわかっていないのではないだろうか。北斗はそんな滝壺を微笑ましげに眺めている。

「けど学園都市にドレスコードのあるお店があるなんて知らなかった。学生の街なのにここってそんなに需要あるの？」

「ここは基本的にＶＩＰ用なんだ。君のために特別に用意したんだよ。気に入ってくれたかい？」

「うん…すごい気に入った」

「それはよかった。苦労して用意した甲斐があるというものだ」

苦労したといっても北斗はコネを使ってこの部屋を用意したのでそれほど労力はかかっていない。そもそもそうでなければこれほどの短期間で用意できるわけがない。

「会員以外は入れないってどういうことですか！くっこれから超どうすれば……」

現在二人は部屋に備え付けられたソファーで北斗が注文した果実酒を眼前の地球を前に飲んでいる。アルコール度数は高めだが女性でも飲みやすいようになっているものだ。普段の滝壺なら警戒して飲まなかっただろうが、今は既に雰囲気に酔ってしまっているのか勧められるがままに飲んでいる。

「どうだろう、今日のお礼は楽しんでもらえたかな？」

「うん、とても楽しかった。ありがとうみかど」

「お礼を言いたいのはこちらの方さ。こんなに可愛い女の子と一緒に過ごせたんだからね」

「可愛いだなんて…」

「恥ずかしがらないでその綺麗な顔をオレに見せてくれないか？」

恥ずかしがって顔を背ける滝壺だったが、北斗は右手を頬に添えると自分の方に向けさせる。両者の距離はわずか１０センチ、アルコールと雰囲気に酔っている滝壺はとろんとした目で熱に浮かされたように北斗を見つめている。

「…みかど……」

「北斗って呼んでくれ」

「……ほくと…」

「理后…」

至近距離で見つめあっていた二人の影が重なる。それは周りの光景も相まって幻想的な雰囲気を放っていた。やがて二人はいったん離れたがすぐに滝壺が北斗にもたれかかり、頭を北斗の肩に預けていた。

「（胸がどきどきする……これが恋？）」

「ほくと…私は嫉妬深いからね…」

「（……ミスったかなぁ）」

「二人は今頃どうしているんでしょう。……まさかホテルで超あんなことやこんなことを！？」

「いいから早く寝ろよ（まぁヤってんだろうなぁ）」

結局気になって眠れない絹旗だった。

## 第七話（後書き）

アイテム攻略ルート次の犠牲者は滝壺です！
滝壺は浜面の！という方はすみません。

作中では簡単に落とされてしまったように感じるかもしれませんが実際は惚れている訳ではありません。
雰囲気に流された感が強いですし、どきどきしたのは単にお酒を飲んで心拍数が上がっただけです。
それを滝壺は恋と勘違いしたんですが、勘違いも気づかなければ本物になりますし。

これからも定期的にケアすれば完全に惚れてくれるでしょう。
けど滝壺は嫉妬深いので主人公が刺されないか心配です（笑）

## 第八話（前書き）

日常パート書くの楽しいけどストーリーが進まない…

今回は金髪碧眼のあの子が！

# 第八話

第三学区。学園都市の最先端技術を紹介する国際展示場が数多く並んでいる学区であり、外部からの客を多く招く為にホテルランクも学園都市最高である。その第三学区の最高級ホテルの一室に御門北斗はいた。バスローブを着ており、シャワーでも浴びたのだろうか、濡れた髪を拭きながらソファで寛いでいる。そんな中、北斗の携帯電話が着信音を響かせる。

「こんな朝早くからかけてくるなよ。はいはい行きますよ。……ったく」

「用事ができたの？」

声をかけてきたのはベッドに横になる少女。こちらは全裸であり、申し訳程度にシーツが体にかかっているだけだ。低血圧なのかぼーっとしている。少女の名前は滝壺理后。前日のデートからそのまま北斗と一夜を明かしたらしい。なお、ベッドの上では積極的だったことを追記しておく。

「起きてたのかい？用事って程じゃない、ただのデートの誘いさ。……とりあえず落ち着こう。デートじゃなくて仕事だから。その持ちあげたオブジェを下ろしてもらえないかな！？」

先ほどまでの無気力な姿とは打って変わり、滝壺はその身を起こし１０キロはありそうな奇怪なオブジェを片手で持ちあげている。やがて納得したのかオブジェをを元の場所に戻し北斗にジトっとした目を向ける。

「笑えない冗談はやめて」

「今のはオレが軽率だった、すまない」

「ほくとが私以外の女の子にも手を出してるのはなんとなくわかるけど、その子達のことも後でちゃんと教えて。……悪い虫なら潰すから」

「今は理后しか見てないさ」

「……嘘つき」

「（どうしてばれた…）」

誤魔化すように滝壺をベッドに押し倒す北斗だったが内心冷や汗ものである。…本当に後ろから刺されるかもしれない。

人目につかない路地裏に停まっているキャンピングカーの中に三人の人影がある。御門北斗、黒夜海鳥、土御門元春、暗部組織『グループ』の構成員である。

「…遅れて来たと思ったらなんだか疲れてるみたいだけど大丈夫かにゃー？」

「ちょっと朝から修羅場ってな…。それはともかくこの前の猫耳パーツありがとな。しかしよくあんなもの手に入ったな」

「仕事で研究所に潜り込んだ時偶然見つけてにゃー。盛り上がっただろ？」

「もちろん。あの時は海鳥もにゃーにゃー言ってくれてな」

「…二人で馬鹿話してないで早く説明しろよ。それに一人足りないみたいだけど？」

「……ちょっと北斗さん。なんかこの子今日はツンデレしてないみたいですけどどうかしちゃったんですか！？」

「いや、最近女の子を部屋に住まわせることにしてな。似たポジションだから危機感抱いてるんだろ」

「なるほどにゃー。黒夜にも可愛いところあるじゃないか」

「うるさいっ！いいから早く説明しろ！」

土御門にからかわれて声を荒げる黒夜。北斗に内心を見透かされていたこともあってか顔が真っ赤だ。

「はいはい、オレ達三人しかいないのはアイツが戦闘タイプじゃないからだ。今回は人手が足りないわけでもないしな」

「俺はアイツのこと苦手だから助かるぜい」

「アイツのことはいいとして、私たちを集めるなんてよっぽどの大事か？」

「いつも通りの仕事さ。ただ一人でやるには面倒だから三人でやれとさ」

「結局なんなんだ？」

「どこぞの研究員が研究成果を持ちだそうとしたらしくてな？その研究員はもう捕まったらしいんだが外部の組織と渡りをつけてたらしい。それで海鳥には待ち合わせ場所に現れるだろう連中の殲滅を、土御門には他にも研究を持ちだそうとしたやつがいないか研究所に潜り込んで調べてもらう。俺はその研究員が逃走に使った雑貨稼業（デパート）を殺害してくる」

「私の担当は皆殺しでいいんだろ？」

「構わない。じゃあさっさと終わらせようぜ」

三人はそれぞれ自分の担当を処理するために散っていく。そこで土御門がふと思い出したように北斗に尋ねる。

「そういえば舞夏がお前に会いたがってたんだが、まさか手を出し

てたりしないよな？」

「……さあ仕事行かなきゃな！」

「ちょっと待て！手出してるのか！？出してるのか！？」

土御門が問いただそうとした瞬間、北斗はその場から消え去った。

「北斗ぉぉおおお！！！」

第十五学区は学園都市最大級の繁華街であり、流行の発信基地として機能している。テレビ局やマスコミ関係の施設が立ち並ぶこの学区はもっとも地価が高い学区でもある。
そんな中にマンションと企業オフィスを合わせたような巨大な総合ビルがある。そんじょそこらの一戸建ての購入金額を上回る程豪華な建物だ。その最上階。そこが『雑貨稼業（デパート）』と呼ばれる男の住居であり、仕事場でもある。一面のウィンドウから広がる景色はその辺のレストランにも劣らないだろう。

「いい部屋だな。オレの部屋程じゃないが」

「そう妬むなよ。別に居心地の良い場所ってわけじゃない。あくまで『隠れ家』の一つだからな。ガサ入れがあればすぐに捨てなきゃいけない物件なんてろくなもんじゃない」

部屋の主である大学生ぐらいの男は、椅子に座ったまま肩をすくめてそんなことを言った。やくざのような北斗を前にしても態度が変わらないのは慣れているからだろう。

「まぁ、何があったかは気かねぇよ。あんたは可愛いウェイトレスに注文を頼むような気軽さで必要な物を言ってくれればいい。お望

みの品は何かな？逃走用の車？隠れ家の鍵？それとも『両替』かな？強盗した現金のロンダリングなら、今日のレートは０．７８だ。なんなら変装や整形も紹介するよ」

男はお勧めの料理説明するような調子で逃走や潜伏に必要な物を羅列していく。

「『ソレ』も商品の一つなのかい？」

「ん？そっちに興味があるのか。悪いけどそれはオプションじゃなくて俺の趣味みたいなもんだよ」

二人の視線の先にあるのは鎖で吊り下げられた十五歳程度の少女。下着だけの人間が両手を枷で戒められたまま吊り下げられている。ところどころに青黒い痣を残す少女は羞恥に身をよじることもなく力なく揺れていた。まだ生きてはいるのだろうが瞳に生気を感じられない。

「いい趣味じゃないか。高かったろ？」

「そこそこね。おい、ホントに壊すなよ。殺しちまったら最低でも八百万は払ってもらうからな」

「売春させてるわけでもないのか」

「そいつは殴るようなんだよ。そろそろ駄目になってきたから新し

いのも買ったんだがまだ仕入れたばかりでね。薬で眠ってるから別室で拘束してるんだ。それともアンタはこういう貧乳が好きな訳？信じられないな」

「貧乳はステータスだよ。まあもう女を見ることもないいんだから彼女で我慢しときな」

「は？」

北斗が言ったことを男は理解できていなかった。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

男の腹から腕が伸びている。いつの間に回り込んだのか北斗が後ろから腕を突き刺したのだ。奇妙なことにその手は一切血に濡れておらず、また傷口からも血が流れていない。

「ぐっ……な、なにしやがる…」

「おいおい、第一声がそれか？腹を貫かれて血を吐かないどころか血が流れていないのを不思議に思わなかったのか？」

「…なに？」

「段々寒くなってきただろ？血を吸ってるんだよ。全身の血を吸わ

れて死ぬなんてなかなか経験できないと思わないか？」

「や、やめ…」

「枯れ落ちろ」

男は見る間に干からびていき、最後には塵となって砕け散った。そしてそれを成した北斗は捲れ上がった袖を元に戻すと何事もなかったかのように少女に近づいていく。男が死んだのを見た少女は僅かに光の戻った瞳で北斗を見つめる。

「…助けに来てくれたの？」

「ああ、そうだよ」

「……ありがとう」

「辛かったろう？もう大丈夫だからね」

「うん……本当にありがとう…」

「…なんて言うと思った？」

「え……」

少女はその意識が途絶えるまで自らの胸に生えた腕を信じられない目で見つめていた。助けが来たと思った直後の裏切りに少女は何を思ったのだろうか。せめてもの救いは絶望を感じる前に死ねたことだろうか。

「いやー最後の顔は見ものだったなぁ。今日の仕事は当たりだ。……さて、海鳥はもう殺し終えたかな？」

北斗は罪悪感を感じる所か嬉々とした表情すら浮かべている。普段はまともに見えてもやはりどこか狂っているのだろう。そしてその興奮冷めぬまま携帯を取り出し、通話し始めた。

「もしもし海鳥？そっちはもう終わったか？」

『とっくに終わってる。私はもう帰ってもいいのか？』

「土御門はまだかかるだろうからオレ達は先にあがろうか。今日は気分がいいから外食でもしに行こう」

『どうせ死に顔が面白かったとかそんなんだろ？とりあえず先に帰って待ってるよ』

「やっぱり海鳥にはわかるか。じゃあまた後で」

その後も電話で下部組織に後始末を命じつつ北斗は部屋の中を歩き回る。まるで下見をしているかのようだ。

「ここもいい部屋だよな。セーフハウスの一つとして買っておくかな？……そういえば新しいのを買ったとか言ってたか」

何の気なしに別の部屋に通じている扉を開けた北斗の目に飛び込んだのは床に座り込んだ人影。まだ薬が抜けきっていないのか瞳が虚ろだ。少しは意識が回復したのかやがてその人影は北斗を見つけると呟いた。

「……お腹すいた。にゃあ」

「……幼女…？」

そこにいたのは金髪碧眼、ゲームの中にでも出てきそうなアイドルのような格好をした１０歳くらいのつい先日知り合ったばかりの少女に似た女の子だった。

## 第八話（後書き）

前書きのせいでフレンダ回だと思いましたか？
残念、フレメアです（笑）

いや、本当はフレンダメインで書こうとしたんですが書いてるうちに性的にも猟奇的にもノクターン行きになりそうで；；
それ以外だと黒夜や滝壺とアイディアが被るんですよねー
なので苦肉の策で妹ですｏｒｚ
アイディアがでないとはスランプか！？

この主人公は非道です。
あそこで助けるのが一方通行、嬉々として殺すのが御門北斗。
あの吊るされてた少女も街でナンパされてるとかなら北斗にも助けてもらえたでしょうに……助けられて落とされて殺されそうですけどね（笑）

## 第九話（前書き）

お待たせしました第九話です！

フレメアって将来フレンダより美人になると思いませんか？

# 第九話

あたりが暗闇に包まれた第七学区。完全下校時刻をとうに過ぎているため昼間とは違い学生の姿は見えない。そんな中、息を切らしながら走る人影があった。

「なんで、なんであの子が…！」

走る人影の名前はフレンダ＝セイヴェルン。暗部組織『アイテム』の構成員を務める金髪碧眼の女子高生である。普段とは違い一切の余裕をなくしている。

「待っててね、今お姉ちゃんが助けに行ってあげるから！」

なぜここまで焦っているのだろうか？
仕事もないため彼女が自室で休んでいたところ携帯に妹からメールが来た。なにかあったのかと訝しみながら確認したところ、彼女の目に映ったのはどこかに寝かされている妹の姿。さらにメールには

『妹を返してほしくば第七学区にある〇〇マンションの最上階まで来い』という文章と地図が添付されていた。それを見たフレンダは驚愕し、最低限の装備を整えるとメールに書かれている場所に向かったのだ。

「今まであの子のために暗部でやってきたんだ。結局、どこの誰だか知らないけど私の妹に手を出したんだから許さない訳よ」

気炎をを上げながら走るフレンダ。妹を攫われたことが逆鱗に触れたらしい。そんな彼女の前に地図に記載されたマンションが見えてきた。彼女はひとまず物陰に身を隠し、マンションを観察する。

「このマンションな訳ね。……周囲に見張りらしき人影は無し。監視カメラは玄関ホールをに二台、エレベーターホールに一台、死角はない。見取り図によれば最上階への侵入経路は直通エレベーター一つだけで専用のキーか最上階の部屋からしか操作できない。……奇襲は無理な訳」

トラップがメインのフレンダにとっては正面から堂々と行くのは避けたいところだったが侵入経路が一つしかない以上何か仕掛けることもできない。それに状況を考えるとあまり時間をかけてもいられない。

「とりあえず下部組織の連中に爆弾を運びこんで貰って……今から最低でも三十分はかかるだろうからすぐに爆破してもらうとしても

それまではなんとか時間を稼がなきゃ。……麦野や絹旗なら正面突破も可能だろうけどこんなことは頼めないし、……結局私の力不足な訳よ」

自身の力不足を嘆きながらも気を取り直し、下部組織に爆弾を偽装して運びこむよう指示を出し、マンションに向かっていく。

「爆発で敵が動揺した瞬間を狙ってフレメアを確保、隙を見て射殺か拘束するしかない訳ね。……視線を誘導するためにスカートでも短くしとくかな」

成功する可能性がお世辞にも高いとは言えない作戦を取らざるを得ないことに歯がみしながらも、言う通りに自分が来たことを告げエレベータに乗りこむ。

「（残りは二十五分。最悪の場合は私の体を使ってでも時間を稼がなきゃ…。待っててねフレメア、お姉ちゃんが必ず助けてあげるから！）」

悲壮な覚悟を抱きながらも妹だけは絶対に助けると誓う。そしてエレベーターの扉が開き妹が囚われているであろう部屋に駆け込んでいく。

「フレメア！無事なの！？今お姉ちゃんが助けてあげるか……ら…

…？」

勢い込んでドアを開けたフレンダの目に飛び込んできたのは…

「グリーンピース。にゃあ」

「嫌いなのか？好き嫌いせずに食べないと素敵なレディーになれないぞ？」

「くっ、北斗の膝の上は私の定位置なのにっ」

「ほくと、早速浮気…？」

「持ってるコップに超罅入ってますけど滝壺さんってそんな力ありましたっけ！？」

「……え？なにこれ？捕まってるんじゃない訳？」

わいわいと料理を食べるフレメア、北斗、黒夜、滝壺、絹旗のほのぼのとした光景だった。

「あっフレンダも来たんですね。遅いんでもう先に食べてますよ」

「お姉ちゃん久しぶり。にゃあ」

「……これどういう状況な訳？結局、絹旗と滝壺は何でここにい

る訳よ」

フレンダにしてみれば妹が捕まっていると思ってきたのに当の本人は普通に食事をしている。混乱して状況がまったく掴めていないようだった。

「おい北斗、アイツになんて説明して来させたんだ？」

「普通に呼んでも面白くないから誘拐した風にな」

「私はそんな騙されたふれんだを応援してる」

ようやく思考が落ち着いてきたフレンダだったが、まだ状況は掴めていないようだった。説明を求めるように妹を膝の上に乗せている北斗に尋ねる。

「…結局なんでフレメアがここにいる訳？」

「話せば長くなるんだが…」

と、北斗は現在の状況に至るまでを話し始めた。

『雑貨稼業』の男が使っていた部屋で少女を見つけた北斗だったが、殺すにせよ助けるにせよ流石にいきなりはないだろうということで少女に話しかけることにした。

「初めまして、お兄さんの名前は御門北斗っていうんだけど君の名前を教えてもらえるかな？」

「フレメア。フレメア＝セイヴェルン」

「セイヴェルン？フレンダの妹さんかな？」

「にゃあ。お姉ちゃんを知ってるの？」

「ああ、つい最近知り合ってね」

答えながらも北斗はフレメアと名乗った少女を観察する。確かに金髪碧眼といいフレンダと似た部分が多い。見れば見るほど人形の様な少女である。

「（姉より美人になるんじゃないか…？）フレメアちゃんはどうしてこんなところにいるのかな？」

「知らないおじさんがくれたお菓子を食べてたら眠くなって……それで起きたらお兄ちゃんが目の前にいた」

「知らない人にもらったものを食べちゃ駄目じゃないか。どこか痛いところとかはないかい？」

「大丈夫。それよりお腹すいた。にゃあ」

「じゃあ何か食べさせてあげるよ。お兄さんに着いてきてもらえるかな？」

「にゃー。おんぶして」

「仕方ないな。しっかりつかまるんだよ」

「にゃーにゃにゃにゃにゃー」

「…なに言ってるかわからないけど髪をいじるのはやめてもらえないかな？手入れには気を使ってるんだよ」

「お兄ちゃんの背中あったかいにゃあ」

「寝ててもいいよ（さて寝たらフレンダに誘拐メールでも送ろうかね）」

つい先ほど少女を惨殺したとは思えない優しさを見せた北斗はフレメアをおぶって歩いていく。内心では悪趣味なことを考えてはいたが…。結局その姿は誘拐にしか見えなかった。

「とまあ、こんな感じでここにいるんだ」

「結局犯人は御門じゃなくても誘拐はされてた訳！？助けてもらえたのはありがたいけど……絹旗と滝壺がいるのはなんで？」

「最愛は最近ここに住み始めた。理后はフレメアとここに来る途中に会ったんだが…」

「私はほくとをストーカーしてたら知らない女の子と一緒だったから浮気かと思って」

ＡＩＭストーカーならぬ北斗ストーカーである。レベル付けするとしたらレベル５はあるだろう。

「あんた達付き合ってる訳？でも麦野とヨリ戻したんじゃ…」

「北斗は超女たらしですからね。フレンダも気をつけた方がいいですよ」

「……ほくと、それ本当？」

「待て理后！他のはともかく包丁はヤバいから！？」

「北斗に手ェ出すンなら殺すぞ？」

「ふぎゃー。お兄ちゃんをいじめないで」

滝壺は目をくわあ！と見開きどこから取り出したのか包丁を北斗に向け、黒夜は窒素爆槍を発動させ、フレメアは北斗の膝の上で威嚇する。そして北斗は戦々恐々としながらそれを見ている。もうカオスだった。

「とにかくフレメアが無事でよかった訳よ」

ドォォン！！

フレンダがほっと一息ついた直後に階下から爆音が響き渡る。

「敵襲か！？海鳥は迎撃！最愛はフレメアと理后を守れ！」

「ここに襲撃かけるなンて死にてェようだなァ！」

「滝壺さんとフレメアちゃんはこっちに！」

「お兄ちゃん……」

「大丈夫フレメアもお姉ちゃんもお兄ちゃんが守ってあげるから」

「……」

「……ふれんだ、どうしたの？」

各々が急な敵襲に対応するために慌ただしく動き始める中、フレンダは顔を青くして挙動不審気味に視線を左右に揺らしている。滝壺が最初に気づいたようだが誰が見ても怪しく感じるだろう。

「…そういえばフレンダは爆弾しかけるのが超得意でしたね」

「フレンダお前まさか……」

全員の目がフレンダに集中する。やがて視線に耐えられなくなったのか大声で言い訳し始めた。

「し、仕方ない訳よ！私は誘拐されたんだと思ってたんだし！つい爆破中止を指示し忘れたなんてある訳……っ！？」

盛大に自爆している。全員の目が厳しくなったがフレメアはよくわかっていないようだ。

「ぶち殺すぞテメェ！」

「これは超お仕置きが必要ですね」

「さすがに私も庇えないかも」

「よくわからないけどお姉ちゃんが悪いと思うにゃあ」

「結局私が悪者になる訳！？」

まさに四面楚歌。追い詰められたフレンダに逃げ場はないように思われた。

「まぁみんなとりあえず落ち着けよ」

「御門！やっぱりアンタはいい男な訳よ！」

北斗がフレンダを庇ったことが意外だったのか全員の視線が集まる。

「フレンダへの追及は後にしておいてまずは後始末だ。警備員にでも踏み込んで来られると面倒だからな。それまでフレンダは縛って転がしておくさ」

「助けてくれるんじゃない訳！？……って縛るの早っ！？」

「…亀甲縛りとは北斗もマニアックだな」

「ほくとが縛りたいなら私もしばっていいよ？」

「いいから後始末いくぞ」

結局フレンダは逃げることはできないらしい。北斗に一瞬にして縛

られフレメアにつつかれている。縛り方が縛り方なのでただでさえ短かったスカートが捲れ上がりすごいことになっている。無駄に扇情的な下着だが本人の雰囲気でいろいろと台無しである。

「ちょっとパンツ見えてる！？フレメアもつつかないで！……
……あっ、動いたら縄が食い込んで…」

「やっぱりフレンダは超ドMなんですね」

「大丈夫。そんなふれんだを私は応援してる」

「にゃー。縛られると気持ちいいの？お兄ちゃん、私も縛って」

「いやそれは流石に……」

「私の時もフレメアと同じくらいだったろ」

フレメアの爆弾発言に北斗はたじたじだ。普通に縛ればいいのに悪乗りしてしまったのが失敗だったかもしれない。フレンダは縛られてるにも関わらず頬を赤く染めており、滝壺はそれをちゃっかり写メっている。…いったいそんなものを撮ってどうするのだろうか。その後も騒いでいた六人だったが緊急車両のサイレンを聞いて慌てて後始末に動き出すのだった。

## 第九話（後書き）

フレメア可愛いよフレメア（笑）

危機管理の低いフレメア、可愛い女の子なら誘拐されちゃいますよねぇ。

それはともかくフレメアって寮住まいでしたっけ？

そこらへんうろ覚えで（汗）

滝壺はだすつもりなかったのにいつの間にか出てきてた……何を言ってるかわからないと思うが作者が一番わからない。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9256z/

---

とある茨の禁書目録

2012年1月8日19時45分発行